

from 'Face to Face' to 'Hand in Hand'



marge 43  
マルジュ

あなたのそばの  
保険代理店  
グット・ライフ



## あなたのそばの保険屋さん

goodlife@cosmos.ocn.ne.jp

# グット・ライフ

ミナイクゴゴ-

TEL 0463-37-1955

FAX 0463-37-1966



All for your better lives. 'Good Life'

モノもらう保険屋はたくさんいるだろう。インフルエンザが流行り、学校閉鎖や休校が報じられたあと、キタさまから電話を頂戴した。折悪しく私は出先だったが、たいていの場合には、店の「窓口」で対応ができる。「声」見知りのない気さくな女性とみつけていたが、わがスタッフにことづけがなされなかった。気がかりの種が播かれる。この次第。ひと月ほど前。チビが風邪をひいたと案じているうちに、立てなくなると、という。救急に運びこむと、そのまま入院。「原因はわかりません」と小児科医はいい。様子を見ましよう十日の安静。ケンサケンサのあけく、病名は不明。二週間ほどしたら「元気になった」のだが、総合病院の白衣らが居並んだ。原因の究明に努めたいので、あと三〇日入院してくださいとの要請。これをふりはらって出てきたいきさつがある。ついでこの間、そう、この入院の保険請求の手伝いに伺った小雨の日、「以前より、やんちゃなくらい」と落ち着いた母親の表情にふれてきたばかり。ちょっぴり垂れた目の脇にほくろ。流感報道と不分明な起立不能が私の中でからみあった。ゆり細で、「みゆきセンセ、だあーいすき」で聞いたばかり。三つのケンサの顔がちらちらする。固定電話はつながらない。ケータイは留守。この日、幾度となくリダイヤル。気がかりが不安へと繋る。夜の予定をご破算にして、キタさんに、会いに、走る。赤信号の数、煙草に火を点け、もみ消す。小路の奥。薄暗がりにはぼんやり浮かぶ「Aioha!」とハイビスカスのレイを刻んだ木の板のかかる玄関を見やる。「ピーン、ピーン。」

まぢかど  
きょうび、やけに間違に鳴るじゃないか。じりじりする私を尻目にいっこう応答がない。なに故の不在か、と疑心が「魔王」を生む。メモ紙を握り、どう一筆したためたものかと思案しつつ、ポールペンの頭を敲く。と、「どちらさまあ」と聞き忘れぬ、快活さがドアホンから響いた。「ほけ……」と切りだすと、「あ、ごめんささい、いま行きますから。」このアルトの声音なら、大事なだ。扉が開かれると甘い匂いがしてきた。聞けば、パートに出はじめ保育園に申込書類を出すほうはうっかりした(一次の×切後だつて「みっともない?」わけないのだ)が、「どうしよう?」ですって。つゆほども悪びれない様子に、私は相好をくずし、「ハイハイ、参上、つこうまつりました。」とたどたと足音、ケンちゃんも参集。やおら「ママの。おいしいよ」とビスケット、ハート型の、を勇みさした。ほんわか温かな焼き菓子は、久しぶり。腰を落として、ここに顔の幼な子と面を合わせてポリポリ食べる。お味は? (童心ももらって、悪態を秘かにつく。ケンちゃん、このビスケットをいとかなんたらグチャグチャ言ってるひとがいるけど、それ、どうよ?)。もち、母の手作りが宇宙一。やーれそれってどこ口許に押しつけてくる。ご機嫌に頬張る私。雀躍するチビを母親がたしなめて「やめなさい、オジサン困っちゃうでしょ。」(とどっちかと言うと……マリコ・ママのほうか)。「いえいえ、みん、ハンカチに包み、押し載り帰りますよ。」私の、明日への心の糧としてなるあび、このポッケのビスケットに優るもの……。なにかある。(仔細を問わず、キャンセルを容れて下さった吉田様に、感謝)



ある時をもって、その前後の時間がまったく異質に感じられる、そういう日付があります。わたしたちは、その時、そのことに敏感でありつづけるつ努力をしています。災難やアクシデントへの不感症、冷感症に罹りがちな日々であるからです。

Drawings by Ruth Robbin in "ISHI, LAST OF HIS TRIBE"

あなたの身近な問題を考えるのが、私たちグット・ライフの仕事です。ぴったりサイズの保険をおあつらえ致します

## 花巻紀行

### \* イーハトーヴの世界 \*

伊勢田 洋次

◆ 湘南地方にソメイヨシノが咲き始めた4月の初旬、所属クラブの会議に出席のため岩手県花巻市を訪れた。この町は平塚市と友好・親善を結んでいる姉妹都市である。東北地方は昨年(2011年)の東日本大震災で大きな被害を受け、岩手県の沿岸市町村だけでも死者4671人、家屋の全壊戸数2万軒以上の犠牲があった。しかし花巻市は内陸に位置しているため、地震のひどい揺れはあったが、家屋が倒壊するような大きな被害はなかったと伺った。

◆ 岩手県は高村光太郎や新渡戸稲造などを輩出した県である。だが宮澤賢治に惹かれて、友人と二人で宮澤賢治記念館を訪れた。閉館間近で、ゆっくり見学できなかったが、館長さんの解説で賢治の思想やその生涯の一端を知ることが出来た。

◆ 「彼が生きていた時代は戦争・地震や津波、凶作や不景気などで、特に農民の生活は惨憺たるものであった。不幸に悲しむ人々の中で彼は法華經に深い感動を覚え、その教えを基盤に創作活動を続けて多くの作品を残した」と話してくれた。

◆ 宿泊した花巻温泉郷のホテルの近くに「釜淵の滝」がある。名前のようにひっくり返したお釜のように見える滝で、農業や地学、鉱石採集などを修めていた賢治も再三足を運んだそうである。「熊に注意」の立て札があり、散策する前に鳴らせと鐘が置いてあった。10分ほど雪道を歩いた。

◆ 会議の翌日、せっかく来たのだからと本隊から別れ、盛岡まで足を伸ばして、日本酒の蔵元である酒造会社を訪問、15代当主の社長から、蘆薈のある日本の酒文化を解説していただいた。

その後、予定コースの小岩井農場を訪れた。雪化粧をした広大な牧場は、まだかまだかと春を待ちわびているかのようだった。サクラの蕾は固く開花はもう少し先、満開を脳裏に描きつつ農場に別れを告げた。

私がこの一年接したなかで、もっとも美しく、考えさせられている文章を紹介します。ピクリスは、北米ニューメキシコ州のプエブロの地域、俗にいうプエブロ・インディアンに地にあります。

\* \* \*

もっとも伝統的な生活を続けているピクリスの出身であるジョゼフ・ラエルは、その村で祖母と暮らした少年時代に、土と光と音響の交錯する日常生活の中の聖性に目を開かれる。

祖母の家は二部屋しかない単純な作りで、扉がひとつ、窓がふたつ。泥と葉と雲母を含んだ粘土をこねたアドベの外壁は、かすかな丸みを帯びていた。

この粘土に含まれた雲母片に陽の光があたると、針の頭ほどの黄金のきらめきが、無数に生まれる。一年中絶えることのない陽光の中で、祖母の家はつねに黄金の光に包まれていた。

部屋の内壁は、床から一メートル足らずの高さまでは赤土で塗られ、その上は天井まで、白く漆喰が塗られる。天井に組まれているのは、樹皮を剥いだままの松の幹だ。

祖母は一日の大部分を、台所にあてられた部屋ですごす。家具のまったくない室内の土間の床に、粘土で焔がしつらえられている。この床を祖母は毎日、手箒で掃くのだが、それはただの掃除ではない。彼女は「掃き清めている」。それは浄化と美化の行為。かれらにとっては、茎を束ねて手箒を作る草自体が、聖なる力をもつものと考えられていたからだ。

土間を掃けば、埃が舞う。その埃すら、人間を超越した何かののだと、祖母は少年に教えた。

そしていよいよ、食事。家具のない部屋では、土の床にすわることは避けられない。しかしその床こそ大切なのだ、と祖母はいう。「この床が表しているのは、生命の床。そこからすべてのものが出現する場所。それはすべてをささえる。この世界にやってくるもののすべては、床から出てくる。床、それは生命の土台。それがわたしたちに食べさせ、着物を与え、住ませる」

土でできた住居はそのまま大地の延長であり、家の内部の空間はそのまま同時に、人間のうちに秘められたものと大地のうちに隠されたもの、両者の広大さを表す。私的な空間が、そのまま宇宙論的な空間に移行するのだ、といってもいい。連想がこうして伸び縮みするのも、きわめて「ネイティブな」感覚だ。そして大地とは花の咲き乱れる場所であり、われわれは大地の小さな花々だ。

だから、床の土に体をじかにつけて食べることが、きわめて重要になる。

食べることもまた祈りの一形式であり、土に体をふれながら食べることで、われわれはわれわれに食物をもたらしてくれる大地につながり、食べるとともに大地にも食物を与えていることになる。

かれらは粘土の素焼きの食器を使ったが、それもまた土と食物との切り離せない関係を意識させてくれる。

そしてスプーン代わりには、半分に割った瓢箪を使った。スープ(おそらくは羊肉とトウモロコシを煮こみ岩塩だけで味をつけたもの)を食べながら、祖母はこんな話をしてくれる。



「瓢箪は音楽でできている。だからおまえたちが食べるすべての食物は、美しい音楽からもたらされるというわけ。音楽を食べるのは、おまえたちの体が、美しい、聖なる音を出せるようにするため。その音から、自分だけの歌を作る。わたしたちが住んでいるこの家は、音でできている。生命もまた、音でできた家。人々は、その生命という音によってできている」

したがって、と祖母は結論する。人間が音でできている以上、耳を傾けるということが非常に重要なのだ。よく聴くことによって、おまえは本当の人間になってゆく。

本当の人間とは、身のまわりで起きているすべてのものごとに絶えず耳を傾け、音響の配置を聴きとる者のことだ。木々のざわめく音、頭上を飛ぶ鳥、部屋に吹きこむ風、誰かの息づかい、話し声、そして沈黙。

音に細心な注意を払うことによつてのみ、人は世界を作った「大なる謎」に接近することができる。そのみちびきを受け、正しい道を歩むことができる。

Rael, Joseph, Being & Vibration, 1993  
菅 啓次郎『野生哲学 アメリカ・インディアンに学ぶ』  
講談社現代新書 2011年5月刊

\* \* \*

ここに展開される、生きて在ることの美学=生の技法(ars vivendi)に比肩するほどのものは、この列島から失なわれてひさしいように、私には思われます。「われわれ」は、産土という聖性観を共有しているはずでした。

さて、核時代に生存する「われわれ」は、人類史をみそなわす時間にわたって災厄に曝される、未曾有の状況に呑みこまれています。

なにかなすべきでしょうか。なにができるでしょうか。私は友人らと語り、彼の地を離れることのできない家庭の子どもたちを7月末から一夏大磯に招くこととしました。その子たちの、精神的ななにか(catcher in Oiso?)になれればと願います。息の長い交際をはじめます。  
[bybodwzo]

謹啓、平素は格別のご高配を賜り、ありがとうございます。本年も、自動車保険のご契約者さまの多くの方が、一年間の無事故でありました。感謝の気持ちを含めて、素品を用意いたしました。ご契約の継続手続きの際にお届けいたします。小社からの花一輪をお受けとりいただければ、幸いです。ご挨拶

店主 敬白



よしさん、ひとは歳を重ねて、健美となる。お会いする度に、その手本に接し、勇気を得ます。いつも通りに、筆談で「祝白寿」七月再見